

# 大分県の山奥の古寺で旅館を営む夫婦

## 中国仏教にゆかりの地を守る

10月上旬、私は大分県九重町を訪れた。九重高原の気温は20度ほどと爽やかな気候だった。私は微博に九重町の広々とした野山の写真をアップし、更に「空気が甘い」と書き添えた。これに対し、一部のネットユーザーが疑問を呈した。空気が甘いなんてことがありえるのか？しかし、朝早く起きて温泉旅館の周りの山林を散歩していた時、私は本当にこの空気の味「甘い」という言葉でしか形容できない味を感じたのだ。



中国仏教にゆかりの「法華院温泉山荘」

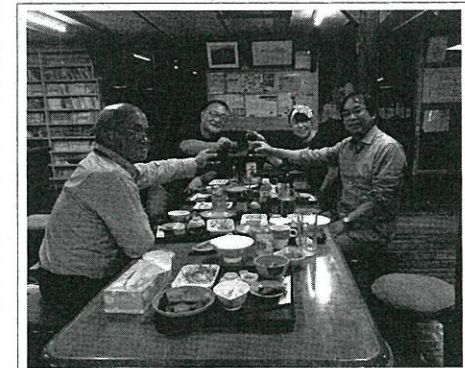
九州地区で最も標高の高い寺院であり、天台宗の重要な修行場所となったのだ。

この話を聞いて、私は自分が浙江省出身であること、法華院に行ってみようということに決めた。法華院は、本当に見に行きたいのならこの山を越えなければならぬと言われている。この山は海拔2000mほどで、少なくとも3時間半の行程になる。

翌日の朝、私と弘藏氏、更に中国経済新聞西日本支社の記者・福田啓一氏と共に登山を開始した。九重連峰の植物は非常に美しく、麓から中腹まで、背の高い木が生い茂り、その半分は紅葉であった。

登山道は非常に狭く、あるいは元から登山者たちが1000年かけて作り上げた獣道なのか、多くの場所では岩をよじ登らなければならず、険しい道だった。

あなたの先祖はなぜこのような山奥に寺院を建てようと思ったのか、弘藏氏に訊いてみると、彼はこうに答えた。仏教が重視する修業は、俗世間から



私と弘藏岳久ご夫妻 (奥方)

離れた清浄な世界で修行しなければならぬ。また、清貧な生活は修行者の意志と信仰の鍛錬と試練になる。私はあまり登山が得意でないため、3時間半と訊いていた道程に、丸々4時間かけてしまった。午後2時になってやっと山を越え、山間の盆地に辿り着いた。この盆地は約3平方キロメートルの広さで、さまざまな野草が生い茂っていた。弘藏氏によれば、晩秋には野焼きを行うのだという。盆地の草をすべて焼き払うと、翌年の春に、また新芽が生えてくるのだ。

弘藏氏はこの野焼きの執行委員会の委員長を務めている。登山者を組織して行う野焼きは彼の一年で最も重要な仕事である。彼によれば、この盆地はユネスコの世界自然遺産として申請しているという。

寺を目指し、山を越えてやってきて修行に励んでいたのだろうか。私は弘藏氏に、なぜ寺院を建て直さないのでか尋ねた。彼によれば、このエリアは現在国立公園となっており、環境省の許可が必要で、手続きが非常に煩雑だと言った。また、寺院を建て直さなければならぬ材料を運んでくるのも大きなプロジェクトになる。高額の資金が必要になる。私は、もし建てなす決心をしたら、一緒に中国で寄付を募ろうと伝えた。

寺院はなくなったが、弘藏氏は寺院の傍の温泉旅館の一角に小さな部屋を造り、寺院が受け継いできた十一面の観音像を祀っている。温泉旅館の正式名称は「法華院温泉山荘」とい、主に登山者の住居・休憩の場となっているため、環境は観光用の温泉旅館ほど良くはない。女将・美代子さんによれば、旅館には畳の大部屋が多くあり、春に学生たちがやってきた際は、最大で300人あまりを受け入れることもあるという。このように身を寄せせる場所があることで、登山者たちは踏破の目標を持ち、夜を過すベースキャンプを得ているのだ。

その夜、弘藏氏と女将さんと共に晩酌した際、中国仏教の話から、日中両国の文化の比較の話になり、最後は彼らの恋愛の話になった。女将さんはなぜか、日本の登山スポーツでもあった弘藏氏は、中国でも登山ブームが起きているため、中国の登山客も九重高原に来て、九重連峰に上り、法華院を通じて日中の交流を促進させてほしいと願っている。(文・徐静波)

(注：弘藏夫妻の営む古寺の旅館の話は中国で大きな反響を呼び、ヒマラヤンジオの視聴者は20万人、ブログの閲覧者は30万人を超えている。)

この古寺はどこにあるのだろうか？弘藏氏は向かいの山を指して、こう教えてくれた——法華院は向かいの山側にある、1000年以上の歴史を持つ寺院だ。中国の唐の時代

に建てられたもので、彼はこの寺院の26代目だという。この寺院の傍には、また1000年の歴史を持つ温泉旅館があり、それも彼らが経営するものだという。

彼の語ったある話がある。法華院と中国には密接な根源関係があるという。唐の時代、日本の高僧・最澄が中国へ赴いて仏教を学んだ。浙江省・台州の天台山で修業を行い、「法華経」など100部以上の経書を持ち帰り、そして日本で天台宗を建てようと思ったのだ。

弘藏氏の法華院は、この盆地と山の間の窪地にあった。私がへとへとになって法華院に到着すると、女将が笑顔で出迎えてくれた。そして私が最初にしたこと、服を脱ぎ棄てて温泉に入ることだっ